

書誌学的研究の一傾向

——書誌研究より誕生した書物——

赤 瀬 雅 子*

本学の共同研究プロジェクトの各チーフは、1994年10月7日付で、前総合研究所所長より、同年5月26日の共同研究プロジェクト代表者会議において、各プロジェクトは研究期間ないしは期間終了後1年以内に所員スタッフの単著あるいは所員を含む共著を1点以上『研究所紀要』に発表するとの申し合わせがなされていることを改めて述べられて、投稿をうながす旨の通知をいただいた。

この激励は私共のプロジェクト「芥川龍之介の読書書誌—比較文学的考察—」にとっても大変有り難いもので、さっそく研究ノートの形で報告しようと考えたものの、本の出版が遅くなり、ようやく今年3月22日付で大空出版より刊行されるに至った。

この本は、高橋俊夫編『永井荷風『溇東綺譚』作品論集成』（全4巻）であって、「所員を含む共著」にあたる。編者は永井荷風の研究者であると同時に、永井荷風の読書書誌・永井荷風の研究書書誌を編むのに長じた第一人者である。赤瀬の収録論文そのものは、『溇東綺譚』におけるピュール・ロティの影響を論じた、1992年度発足のプロジェクトがはじまる以前のもので、これを自身読み返して必要があれば手を入れるというものではあった。

しかし高橋氏が『永井荷風『溇東綺譚』作品論集成』を構想しはじめた頃からの書誌的論文の幾編かを氏自身からいただき、それらから学んだことは小さくない。そして本学の共同研究の場に、病身の氏自身に来ていただくことは不可能であったが、その業績を通して共同研究の

メンバー全員に資してくださったものは大きい。拙論が収録されているが故に『永井荷風『溇東綺譚』作品論集成』の長所を述べることには忸怩たるものがあるが、できるかぎり客観的に近年の研究傾向とこの著の意義とについて、研究ノートの形で報告させていただくこととする。

当プロジェクトは前述のように「芥川龍之介の読書書誌—比較文学的考察—」である。私共にとってもっとも大切なことは、新しい研究傾向を把握することであった。芥川龍之介はロシアにおいて研究が進んでいる作家である。石川啄木の愛好者が多いロシアで、何故芥川をと思いたくもなるが、一種独特のセンチメンタリズムと、暖国にはないストイックな要素が理解されたのかとも思われる。そしてさらに本質的なことは、比較文学的考察とは言っても、外国文学の影響に幅を持たせて、一作家に影響を与えた外国文学を、単に横の線としてみるのではなく、いわば非常に幅のあるベルトとして見ることの重要性である。これを共同研究の中でメンバーに示唆したのは、国松夏紀助教授である。氏はこのプロジェクトの前に属していた1994年3月終了の「中村真一郎の比較文学的研究」の中で、『蠣崎波響の生涯』をとりあげて中村の古典理解についての重要な発表を行っている。

比較文学的研究の基本は、恒に外国文学の影響を見ねばならないが、そこに引き上げられる外国文学そのものの伝統との深い繋がりが、図式的に述べれば幅の広いベルトというものである。

「中村真一郎の比較文学的研究」の共同研究プロジェクトのメンバーの全員が「芥川龍之介

*本学文学部

の読書書誌「比較文学的考察」に入ったわけではないが、これら新旧両プロジェクトのいずれにも属したメンバーは、後者の新プロジェクトにおいても『蠣崎波響の生涯』を読み込むような作業が必要であることを、認識したのである。

分かり易い例でのべれば、芭蕉の『奥のほそみち』は、盛唐の大詩人杜甫を下敷きとしているという考察はかつてはタブーであったが、現在では基本的な知識として高校生にも語られているといったこともある。非常に伝統的な日本回帰の作品とみられるものにある外国文学の影響をみるのも、極度にバタ臭い作品と思われるものにある伝統の影響を探るのも、比較文学的手法によってしかできない。むろん、後者は、比較文学的研究の前提となるものとして扱われねばならない。

芥川龍之介も中村真一郎も、周知のように、作家の中でも選り抜きの読書人であり、典型的な書齋人である。わが国に近代文学がはじまってこのかた、彼等のように主として書物から人生を知ったということを誇らかに述べた作家は、意外に少ない。影響とは何かがまだ十分に論議されていないことの証左でもあろう。

その少数派の芥川や中村が、読書人ということで照明を当てられるようになってきた今日、書誌学的研究は是非とも必要である。中村真一郎に関しても、芥川龍之介に関しても書誌学的な考察を指導的におこなって来たのは、メンバーの志保田務教授である。氏はまた現在、精力的に芥川龍之介の読書書誌を中心となってつづっている最中であり、その成果の一端は、すでに冊子として刊行されている。

中村真一郎の芥川龍之介への関心も深いが、そのはじめは、中村が芥川と自身との資質の一致を自覚したところからはじまっている。出原博明教授の中村真一郎におけるヘンリー・ジェームズの影響についてのプロジェクト例会での研究発表も、多年のヘンリー・ジェームズ研究から他のメンバーに資するところが多くあった。現在、若い学生たちは一般的には文学から遠ざかっているが、研究者達はかつてより精緻な、

そして汎世界的な研究を行っていて、自由であり過ぎるかに見える比較文学研究の世界でも、本質的にアカデミックな研究が成果を挙げているといえよう。

その第一が書誌学的研究であり、第二が個々の作家の作品において使用する語彙の考察である。わが国ではまだ一人の作家のみに関する事典は、啓発的なものが刊行されている段階であって、それによって新しい研究の地平が開かれるというようなものは未だ刊行されていない。例えば、紫式部や夏目漱石に関して、フランスのジャン＝ジャック・ルソーの語彙事典のような浩瀚なものを意識した事典が生まれてもよいであろう。ただし日本文化と日本語の特質から云って、著しく困難な部門であろうかと思われる。

第三が、高橋俊夫編『永井荷風『溍東綺譚』作品論集成』がその例となる研究である。高橋俊夫教授が永井荷風研究の蓄積から『溍東綺譚』に着眼したことの確かさを踏まえて、この著はわが国においては第二のものよりも成果が挙げられると思われる種類の研究の先鞭をつけている。

全四巻より成るこの本の冒頭の「解説」は、白眉である。氏のように、多年一人の作家の研究に打ち込んだ研究者にあっては、夥しい研究論文を、自分に納得できるものとそうでないものとに分類したいという考えが萌しもするであろう。氏はそれを極力避け、一つの文学作品の研究史として客観的でありながら、同時に編者の意図も明確になるものを残そうと意図している。「解説」の「(一)」の部分につぎのようにある。

ところで、私家版・岩波版・朝日連載本文は、それぞれ異本関係にあり、その異動は高橋俊夫「溍東綺譚私注」(昭和51)に詳しい。問題は自筆原稿の検索である。これを探索発見した功績はひとえに小門勝二に帰すべきものである。氏の「溍東綺譚自筆原稿複製にあたって」(昭和46)にその経緯は詳しい。ちなみにその複製は中央公論社から刊行された。冒頭の部分四十数枚は欠落していて、その分、

私家版作製の折りの著者校正刷が入っている。

小門勝二の荷風に関する著作は正に汗牛充棟のものであるが、多くはフィクションを含む読みものであって荷風研究の資料として、そのまま使うには耐えない。ここには幾つかを収めた。

確かに、小門勝二氏の永井荷風に関する著作は多く、銀座や浅草や溷東を逍遙する荷風散人に、小門氏とほとんど重なる人物が同行するという体裁の読み物は、荷風を一般化するのにおおいに役立った。氏はパリにまで散人の足跡を尋ね、陋巷カンカンボアの門番と親しく語ったとしてこれに充てられた部分も少なくはない著もあるが、それはその付近のアパルトマンの「門番」ではなく浮浪者、コンシエルジュではなくクロシャールであったのであろう。

しかし氏の著作で受賞したものもあり、読み物としては興味深いものもある。さらに『溷東綺譚』原典の探究に資した氏の功績を重点的に見ていることは、高橋教授のこの著を編んだ姿勢が何処にあるかを明確に示しているといえよう。

『溷東綺譚』は昭和11年9月から10月にわたって書かれ、昭和12年『朝日新聞』に連載された。この著では昭和12年7月、改造社刊の『文芸』第5巻第7号に載せられた萩原朔太郎の「漂泊者の文学—永井荷風氏の溷東綺譚を読む」が冒頭にある。この年の論文は4編で、佐藤春夫、片岡良一の論文について11月に、岩波書店刊の『文学』第5巻第11号に載せられた平井呈一の「永井荷風論—読「溷東綺譚」が収録されているが、これは注目すべき論文である。

平井呈一の論は作品をよく味読し、作中作「失踪」の問題について、ジッドの「パリュウド」を指摘するなど、鋭鋒を見せた。なお、この指摘は平井宛の荷風書簡によって肯なわれている。

その後、戦後に到る迄、一篇の『溷東綺譚』論も、わたくし達は見ることを得ない。戦争という愚行がそれを許さなかったのである。荷風も亦、作品の発表ができなかった。

このように高橋教授が述べる通り、戦前の最

後の論文でもあったこの『溷東綺譚』論は、比較文学的研究の先駆をなす論文としても光っている。アンドレ・ジッドがフランス文学史上、思想的に特異な位置を占める作家であるばかりでなく、小説手法の冒険を常に試みる作家であることをよく識ってはじめて、平井氏はつぎのように論述するのである。

私はふとここでアンドレ・ジッドの「パリュウド」を思ひ出した。勿論両者の作品としての味はひは作者が東西に国を異にしてゐる以上に雲泥であるが、小説の中に作者が考案しつつある今一つの作品を挿入して、宛も二つの作品を並行的に進行せしめたが如き体裁をもって、そこになにものかを考察せしむる一篇の趣向は甚だ彼と相似てゐる。

このように平井氏は永井荷風に宛てて、新作発表の祝辞を述べるついでのように、このことにも言及した私信を出す。荷風からは、つぎのような返書が来る。

（前略）扱拙作につき御過賞唯只汗顔の至りに候御手紙の通パリュードの体裁一度拙作中に取入度と多年の願望にて有之候パリュードには精霊の悩みとも申度き神秘の色有之候へども拙作にてはどうやら隠居の戯作らしく相成候然しこれが作者の持前故如何とも致難しと存居候（後略）

永井荷風の初期の作品『すみだ川』におけるアンリ・ド・レニエの影響などもそうであるが、戦前にも原典の確固とした読み込みからのアカデミックな影響研究の萌芽が存在したのである。また永井荷風のような書斎派の読書人といった型の作家にあっては、機会があれば、それに対する解答も書簡等の形で寄せられた。

思うに、荷風の場合は、作家と読者とが同じサロンの常連である、フランスの読書階級の雰囲気もよく識り、読者としての平井氏に宛てた返書を楽しんで書いたものであろう。私共のプロジェクトで扱うことのできる作家はすべて書斎派の作家である。中村真一郎もこの意味で永井荷風と同一の雰囲気を持っているといえよう。

芥川龍之介となると、残念ながら影響ということ肯定的に考えるまでの余裕を持たない

ちに没してしまったので、例えば、私生活上の深刻な体験と、メリメの『カルメン』に靈感を得たことによって生まれた『偷盗』と『カルメン』との関係を云々されること自体を、極端に避けているのは皮肉なことである。しかし芥川がその燦然とした才能を、古今東西の文学を識っていることによって示そうとしたことは周知の通りである。

私共がここ数年にわたって共同研究プロジェクトによって考察して来た作家のうち、現役の作家である中村真一郎は、その読書体験のみを語った書物だけでも十数冊にわたるものを出している。そしてそこに挙げられた書物は、作者の読書中の体験などをまじえて述べられていて、これらの膨大な書物を読破したことは肯定できる。

しかし永井荷風や芥川龍之介は、明治期・大正期という時代を背負っている故か、読んだ旨を日誌や書簡によって述べている書物自体は信用できるが、その読みはじめた時から読み終えた時までがあまりにも短期間である場合など、その読了については疑義がある場合が多い。

昭和12年、『溼東綺譚』が人々の目に触れた年の11月に発表された前述の平井呈一の論文を最後に、『溼東綺譚』に関する評論・論文には満9年にもわたる空白がある。戦時中と戦争直後の時代相は、『溼東綺譚』を論ずることを許さなかった。灯火管制の下、密かにこの書を繙いていた少数の読書人は存在したであろうが、この作品は、むしろ戦後、荷風文学が解禁になり、多くの人々の目に触れるようになってはじめて、その価値を認められたといえてよい。

昭和22年12月、国立書院から出された佐藤春夫の『荷風雑感』の中に「溼東綺譚 再説溼東綺譚」として論じられているのが、戦後の論文のはじめである。

この研究ノートは限られた紙面ではあり、私共のプロジェクトの比較文学的な書誌研究に関連した論文のみを取り上げて行かざるを得ないので、ついで石川淳の昭和44年12月発行の角川文庫の『溼東綺譚 ひかげの花』の解説をみたい。

文に書卷の気の存することを猥にきらうのは、尋常稗官者流の怠惰である。高閣の書卷の気、陋巷の売女のうつり香、あわせ呑んで文品の冴えたるものを粹という。けだし *galant* の精神である。フランス王アンリ四世のようにではなく、モオパッサンのように、またレニエのように、詩人は老いてもつねに *galant* であることをやめない。陋巷をめぐるために、ことさらに褻衣のきよらかならざるものをえらんで身につけるのは、それが適切なるおしゃれというものだろう。このようなおしゃれはまた風俗に対する批評でもある。

一代の伊達者ボッ・ブランメルとまではゆかなくとも、画壇におけるフランスロマン派の巨匠ユージェーヌ・ドラクロワは、19世紀半ばのフランスの芸術家きっての伊達男であった。この時代、伊達とは先ずフランス人の視点からのイギリス紳士の模倣であらねばならなかった。殊に若い留学時代の荷風が傾倒したシャルル・ボードレールの伊達者振りは、最初、ドラクロワの模倣からはじまっている。この二人の巨匠の没年は前者が1863年、後者が1867年である。両者の没年の間に挟まって、アンリ・ド・レニエは1864年に誕生しているが、あの高雅な詩心、ヴェネチアに対する偏愛の基底には、彼の一代前のフランスの芸術家にみられるのと同じイギリス志向が存在する。

フランス語・フランス文学を学んだ作家石川淳は、戦後早稲田大学にフランス語を講じていた。現役の作家であった彼は、手のうちを明かしてはいないが、フランス文学史中の詩人・小説家の名を出しながら虚構の糸を紡いで行く手法を使った点で、彼こそ、『溼東綺譚』と同じ範疇に入る作品の書き手であったといえるのではなかろうか。この解説では、彼はただ、陋巷を語るのに「ときに古本のことをいい、江戸の儒者のことをいい、唐山の古詩を唱し、また夏日に書をさらし冬日に落葉を焚くおもむきを語るのは、すべて怪しむにたりない。」としている。

この書には、高橋教授自身の論文も各巻にわたって収録されているが、私共のプロジェクト

に関連していえば、至文堂刊の『解釈と鑑賞』第41巻第14号の「失われた時の探索者たち「瀬東綺譚」と江戸小説」を挙げなければならない。荷風はわが国の近代文学中では、森鷗外の記事を最も優れたものと見做していた。これは他の作家にも例が多かろう。しかし江戸の文人では横井也有の『鶉衣』を「鶉衣の思想文章ほど複雑にして蘊蓄深く典故によるもの多きはない。」と評していることに、高橋教授はとくに注目している。ヒロインお雪の住む家の路地の風景は一茶を、老作家大江匡とお雪のやりとりは柳多留のなかの一句を思わせることを指摘している。また深川という土地の洒落本との関係も深い。

第4巻に収録されている『三田文学』第67巻第14号の江藤淳氏の「メタ・小説としての『瀬東綺譚』」は、主人公大江匡の短かい述懐から、時代相を把握しようとするものである。1970年代と1980年代に出されたこれら二つの論文の提起するものは、文学作品の経糸をなす文学史的把握と、緯糸をなす比較文学的把握とを、かつてのフランスのラルース・クラシックの注釈で行なわれているように、さらに深く詳細にすべきであるということであろう。テキストがテキストを生むという事実を、詳細に語ることの出来る現代に生きていることの幸福は大きい。